



# 六 郷

ろくごう

六郷小学校 学校報

R2. 4. 22 (水)

No. 4

**明日から臨時休校になります。  
ゴールデンウィーク前後のここが、  
しのぎ時かもしれません。  
ご理解とご協力をお願いいたします。**

4月6日の始業式から、進級した学年での学習を始めた2年生から6年生の子どもたち。そして、4月8日の入学式から小学校生活をスタートさせた1年生。とても晴れやかな顔で登校する姿があり、一つ一つの授業に興味をもって一生懸命に取り組む姿があります。休み時間（しみずっ子タイムや昼休み）には、友達と思いきり遊んだり、本に親しんだり、上学年では、係活動や集会のための準備をしたりする姿もあり、どれもが微笑ましいものです。

それぞれの学年の子ども、そして一人一人の子どもたちの姿に成長の様子を感じ、うれしく、またありがたく思っております。

「この子どもたちの輝く瞳を守りたい、やる気に火を灯し、更に成長させたい、心を豊かに育みたい、丈夫な体をつくらせたい……」我々教職員が共通してもっている願いです。それは、きっと保護者のみなさん、ご家族のみなさんも同じだと思います。

新学期が始まり3週間ほどで、また休校に入りますが、子どもたちの健康・安全を守り、学習や学校生活に対する意欲を継続させていけるよう、ご家庭の皆様と連携してまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

各学年から「学年報」が出されております。また「生徒指導だより」もお渡ししました。それぞれの学年に沿った留意点、お願い等に目を通し、次の登校日(4/30)までを一区切りに、お子さんの課題等のチェックや、生活リズムの維持に、ご協力くださるようお願いいたします。



## 【連絡】

徒競走記録会は、延期します。



## 六郷小学校の誇り しみずっ子活動!



本校で大事にしている教育活動には、縦割りグループによる活動があります。

今年度は32のグループが誕生しました。1年生から6年生までの7人～8人のメンバーで構成されます。

その発足のために、また、1年生を歓迎するために、「なかよくなるうしみずっ子集会」を行いました。十分な換気をし、体育館いっぱいを使って、また、短時間でということに配慮した上での実施です。

6年生は、この会のために準備を進めてきてくれました。2年生は、全校を代表して六郷小学校の学校生活を紹介しながら、歓迎の言葉を全員で表現してくれました。

各自が持ち寄った「自己紹介カード」をグループごとに色画用紙に貼ると、素敵なポスターが出来上がりました。その後、グループごとにジェスチャーゲームをしました。その説明のため6年生の代表が模範演技をしてくれました。笑いを誘いながら分かりやすいパフォーマンスでした。

各グループでは、お互いのジェスチャーに答えながら和やかにゲームを楽しみました。

その後、さっそくこの日から始まる「新しい清掃場所」にグループごとに移動し確認し合いました。毎日の掃除や、さまざまな「しみずっ子活動」に、協力し合って取り組んでほしいと思います。

# 子どもたちの感性の豊かさは



教室をお邪魔した2年生では、図工の授業が行われていました。竹組は「粘土」を使って、松組は「絵の具」を使って、想像の翼を広げながら作品づくりに熱中しています。



5年生では、2時間続きの図工の時間として、春の風景を絵の具で描いていました。



廊下の壁に作品を掲示していた先生と、「子どもたちの感性には、大人はかなわないですね。教えられることたくさんあります。」といった会話を

を交わしました。

学校では、様々な教科や活動を通してメリハリのある学習を進めています。そうした当たり前のことが安心してできる日が、継続してできることを願いながら、この難局を乗り越えていきたいものと思います。

## 私たちが、今心がけるべきこと

- 健康の維持
- 不要不急の外出を控えること
- この状況の中で働いてくださっている方がいることに感謝すること
- うわさに惑わされないこと
- 医療に関わる方、感染された方やそのご家族、濃厚接触等の疑いで様子を見ている方などを決して差別しないこと  
などではないでしょうか。

## サッカーJリーグ 横浜FC 三浦知良選手のメッセージの紹介

我々も意識を高くし、希望をもっていきたいものです。



クラブハウスが閉鎖され、グラウンドは使えず、利用していたジムも1か月近く休止している。自分で所有している器具で最低限の運動をする日々が続く。

自分が新型コロナウイルスにかかることも、他へうつすこともあってはならない——。プロスポーツ選手は誰でも、そんな大きな責任とプレッシャーと隣り合わせの生活を送っていると思う。クラブに、対戦相手に、試合開催に。自らが及ぼす影響が大きすぎる。

屋外を走りたくなくても、感染するかもと控えてしまう。ほんの3分ほどでもいったん家の外に出たら、何に触れていなくても手をゴシゴシと洗う癖がついてしまった。うちの息子たちは街で遊びたい年ごろだけど、家族にも同レベルの緊張をしいてもらっている。

「え、行くの?」。ある同僚は奥さんにとがめられつつ練習へ出ていた。4月初旬、1か月先にリーグが再開する予定の一方で、感染への危機感が増していた時期のことだ。一部屋に40人近くが集まるミーティングのさなか、僕も声を上げた。「緊急事態宣言も出そうなときに、こうして集まって、練習していいの?」。選手の大半が同じ思いだったという。自らをリスクにさらしてでも、命や社会機能を守るべく奮闘する方々がいる。休みたくても、休めない人がいる。でも選手は、そうじゃない。

いつ電話しても満席だったなじみの繁盛店は、店の維持さえ難しい状況に追い込まれた。我慢は、先が見えてこそ我慢できるもの。娯楽や明るい話題も楽しめず、それどころでない人々がたくさんいる。そんな状況で、僕らが「何か希望を」などとはいえない。

すべての行動が制限されるわけでない緊急事態宣言は「緩い」という声がある。でもそれは、日本人の力を信じているからだ僕には信じたい。きつく強制しなくても、一人ひとりのモラルで動いてくれると信頼されたのだと受け止めたい。

戦争や災害で苦しいとき、隣の人へ手を差し伸べ助け合ってきた。暴動ではなく協調があった。日本にはそんな例がたくさんある。世界でも有数の生真面目さ、規律の高さ。それをサッカーの代表でも日常のピッチでもみてきた。僕らは自分たちの力をもう少し信じていい。日本人はこういうとき、「やれるんだ」と。

「都市封鎖をしなくたって、被害を小さく食い止められた。やはり日本人は素晴らしい」。そう記憶されるように。力を発揮するなら今、そうとらえて僕はできることをする。ロックダウンでなく「セルフ・ロックダウン」でいくよ。

自分たちを信じる。僕たちのモラル、秩序と連帯、日本のアイデンティティーで乗り切ってみせる。そんな見本を示せたらいいね。